

写真3 試料1 1号品

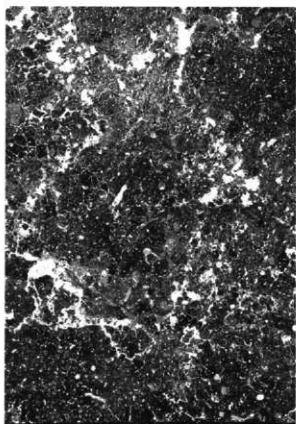


写真4 試料2 2号品

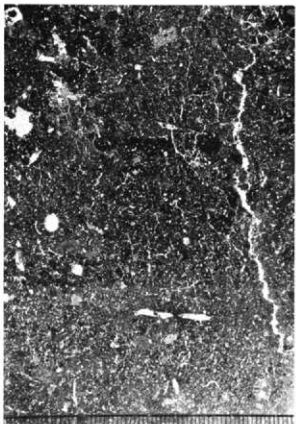


写真5 試料3 3号品

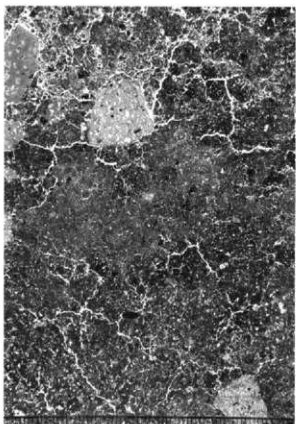


写真6 試料4 1号品

試料4は、FP純層下の畝跡の中を蛇行する道から採取した土壌断面である(写真6)。グランドマスは、試料2と同様に、褐色～茶褐色(PPL)の細砂～中砂と鉱物粒子、炭化物粒子から構成される。粒径は小さく全体にはばらばら揃っている。細かな炭化物粒子を多く含む。また火山ガラス、長石などの鉱物が細かく砕かれた状態で含まれている。孔隙の最大径は1mm以下であり、線状の孔隙の長さは2～3mmから10mm前後である。元来ベッドを構成する粒土は密であり発達はない。未攪乱土壌に特徴的な歪角塊状構造をなす様子から、試料1・3ほど土壌が人為的に攪乱を受けていないことがわかる。

4 考察

試料1・3の微細形態は、現世のはたけ耕作土壌と比較しても間隙率、粒土構成、マトリックスに共通性が多く見られる。さらに試料1の上部は粒径が細かく、下部の火山灰をマトリックスの中に多く含んでいることから、FP降下直前まで耕作が行われていた状況を示すものと考えられる。試料3は試料1と大変よく似た構造を持ちながら、やや粒土の密度が高い。耕作土の特徴を同じようにもちながら、その粒土の密度に差がみられるということは、耕作の時期あるいは頻度の差異を示している可能性が指摘できる。これに対して試料2・4は、それぞれ畦と道から採取した試料であるが、現世の非はたけ耕作土と団粒構造に共通点がみられる。

今回分析に用いた試料は、火山性噴出物に瞬時にバックされた畝遺構から採取した試料群であることから、今後、遺跡から検出される古耕作土に関する基礎試料とすることができよう。

今後さらに比較試料を蓄積し、古耕作土・施肥に関するデータベースを構築し、従来調査段階での認識が困難とされてきた古耕作土の調査に寄与できるであろう。

※用語は土壌薄片記載ハンドブック (Bullock, P. et al. 著, 平山良治はか訳 1989)による。

参考文献

宮路淳子・松井華・平山良治 2000「野木遺跡の畝状遺構の土壌微細形態学的分析」『野木遺跡Ⅲ』青森県教育委員会
Courty, M.A., Goldberg, P. and Macphail, R.I. 1989. *Soils and Micromorphology in Archaeology*. University Press, Cambridge.

畑遺構における土壌化学性に関して

須永薫子(独)国立科学博物館)

1.はじめに

これまで農耕地遺構研究は、水田跡を中心に行われており、畑遺構の発掘事例は少なく、生産性等総合的な研究は行われていないのが現状である。畑は水管理のみならず養分の補充が必須であることから、土壌理化学性に埋没当時の痕跡をとどめている可能性がある。著者のこれまでの研究から群馬県で発掘された1783年の浅間山噴火に伴い埋没した畑遺構の土壌理化学性に埋没以前の畑利用による影響と考えられる特徴を確認することができた(須永ら2003)。しかしながら、土壌の理化学性には、人為のみならず母材や気候による影響があるため、様々な気候および堆積環境の埋没畑遺構土壌で研究を行うことは、畑遺構の研究において重要な意義があると考えられる。

本遺跡では、6世紀の第2四半期に噴火したと考えられている榛名-二ツ岳軽石(以下 Hr-FP と称する)によって埋没した層位に、畝跡と考えられる平行する高まりが確認され、これらは畑遺構(以下畑跡と称する)と考えられた。また、これらの畝跡は明確に確認できたため畝の有り無しで畑跡であった可能性の高い地点、畑として利用されていた可能性が低い地点を確認することができた。そこで、これらの層位および比較検討のため、同様の層位で畑として利用されていた可能性の低い地点を対照地として土壌試料を採取し分析に供した。以下に採取地点および分析に供した土壌試料を示し、分析方法および分析結果を報告する。

2.供試土壌(採取地に関して)

土壌試料は2003年12月に、Ⅲ区から採取した。規則的に平行して畝状遺構が確認できた地点を畑跡として試料を採取した。なお、ここでは畝状遺構の高まりの部分や山部と称し、溝状に窪んだ部分を谷

部と称することにする。畑跡で採取した土壌試料の概略を図1に示す。

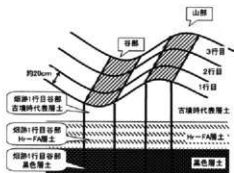


図1 試料採取地点の模式図

対照地は、規則的に並んだ畝状遺構がとぎれた地点である。これを埋没以前には畑ではなかった地点と考え、試料を採取した。ここでは、この地点を対照地と称する。

両地点ともに、本報告では、榛名-二ツ岳軽石(Hr-FP)直下の層位を古墳時代の表層土と考えられることからここでは古墳時代表層土と称する。さらにその下層から、榛名-二ツ岳降下火山灰(通称 Hr-FA、以下 Hr-FA と称する)と考えられる層位が認められた。この層位の土壌試料を Hr-FA 層土と称する。Hr-FA 層の下位層には黒色の層位が認められ、本報告ではこの層位の土壌試料を黒色層土と称することにする。なお、古墳時代表層土は Hr-FA を母材とし、有機物の集積が進んだ土壌と考えられており、Hr-FA から Hr-FP 堆積までの期間は約 20~30 年(坂口, 1993)と考えられている。

各地点は、調査区の壁を約 50cm 程度掘り、新鮮な断面を作成し試料を採取した。また、各地点の直上に当たる地点の現代の表層土を採取し、分析に供した。供試試料の一覧を表1に示した。

3. 分析方法

土壌の基本的な性質として pH (H₂O, KCl)、リン酸吸収係数、土壌有機物量として全炭素量および全窒素量を測定した。これらの分析項目は土壌の母材や堆積環境によって影響を受けると考えられている。一方、埋没以前の畑利用に伴い変化する傾向の強い、可給態リン酸量および易分解性有機物量について分析を行った。

易分解性有機物量以外の分析は、土壌環境分析法(1997)の方法を用いた。易分解性有機物量は、須永ら(2003)による方法を用いた。

表1 供試土壌試料一覧

採取地点	採取地点	形状	層位
畑跡	1行目	山部	古墳時代表層土
			Hr-FA層土
			黒色層土
	谷部	古墳時代表層土	Hr-FA層土
			黒色層土
			黒色層土
	2行目	山部	古墳時代表層土
			Hr-FA層土
			黒色層土
谷部	古墳時代表層土	Hr-FA層土	
		黒色層土	
		黒色層土	
3行目	山部	古墳時代表層土	
		Hr-FA層土	
		黒色層土	
谷部	古墳時代表層土	Hr-FA層土	
		黒色層土	
		黒色層土	
対照地			古墳時代表層土
			Hr-FA層土
			黒色層土
畑跡の直上			現代の表層土
対照地の直上			現代の表層土

4. 結果および考察

pH (H₂O)の結果を図2に、pH (KCl)の結果を図3に示した。pH (H₂O)、pH (KCl)ともに古墳時代表層土およびHr-FA層土の対照地で幾分高い傾向が認められた。また、同様の層位で3行目の谷部、山部でともに幾分低い傾向が認められた。こうした傾向は黒色層土では明瞭に認められなかった。pHは様々な因子に影響をうけるが、特に水とともに移動する陽イオンに強い影響を受けるため、本報告では陽イオン以外について検討を行った。pHの

ばらつきの原因については、今後より詳細な検討が必要である。

全炭素量の結果を図4に、全窒素量の結果を図5に、易分解性有機物量の結果を図6に示した。全炭素量、全窒素量、易分解性有機物量、ともに古墳時代表層土の畑跡の全ての地点で、古墳時代表層土の対照地よりも高い傾向を示した。こうした傾向は、全ての層位で認められた。対照地と畑跡の差は黒色層土では少なく、Hr-FA層土で顕著であった。これは、耕作に伴いHr-FA層土へ下層の黒色層土が巻き上げられたことが一因と考えられた。全炭素量、全窒素量ともにHr-FA層土では、谷部でこの傾向が強く、山部では比較的低い値を示した。

可給態リン酸量の結果を図7に示した。可給態リン酸量は全ての地点で、古墳時代表層土、Hr-FA層土、黒色層土の順で低い値を示し、黒色層土は古墳時代表層土の約1/2以下の値だった。古墳時代表層土の可給態リン酸量は、全ての地点で畑跡が対照地に比べ高い傾向を示した。これは畑利用に伴いなんらかの施肥行為がおこなわれた可能性を否定できないと考えられた。さらに古墳時代表層土の可給態リン酸量について、平面的な分布を図8に示した。古墳時代表層土では山部が谷部に比べ幾分高い傾向を示した。これらの結果は埋没以前の何らかの施肥による影響が考えられることから、古墳時代表層土の形状と可給態リン酸量との傾向をより詳細に検討することが有効であると考えられる。

リン酸吸収係数の結果を図9に示した。リン酸吸収係数は土壌が植物に必須な要素であるリンを吸着してしまい植物が利用できない状態にしてしまう能力であり、一般に15を超えると植物生育の障害になることが知られている。また、粘土等、母材による影響を受ける性質が知られている。古墳時代表層土では、畑跡と対照地の差が少なく、ほぼ同様の傾向を示すことがわかった。黒色層土では全ての地点で15を超える高い値を示した。Hr-FA層土では山部に比べ谷部が高いことから有機物量の傾向と同様に黒色層土を巻き上げたため、リン酸吸収係数が

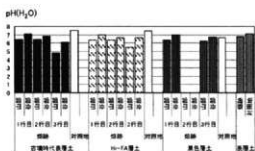


図2 供試土壌試料のpH(H₂O)

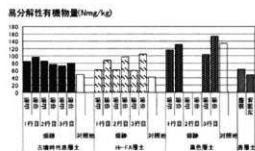


図6 供試土壌試料の易分解性有機物量

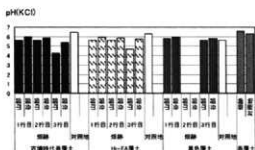


図3 供試土壌試料のpH(KCl)

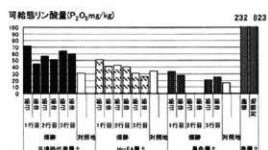


図7 供試土壌試料の可給態リン酸量

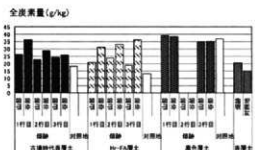


図4 供試土壌試料の全炭素量

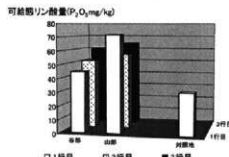


図8 古墳時代表層土の可給態リン酸量

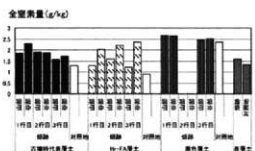


図5 供試土壌試料の全窒素量

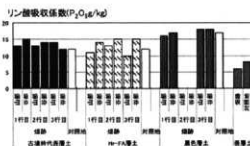


図9 供試土壌試料のリン酸吸収係数

高い値を示したと考えられた。

易分解性有機物量を可給態リン酸量で除した値は、畑跡で低く、自然植生下では高い値を示す傾向があることがわかっている(須永ら2003)。そこでこの値を計算し図10に結果を示した。古墳時代表層土については、対照地が幾分高い傾向を示したが、

明瞭な差は確認できなかった。

子持村内で調査された3遺跡の結果と比較した。各遺跡ともHr-FP層の直下の層位(古墳時代表層土)に、畝状の遺構が確認できた地点を畑跡(図中では畑と表示)、遺構の形状から畑ではなかった地点で、かつ道や馬の足跡等の形状が確認された地点は

除いた地点を対照地(図中では対と表示)として集計し平均値を比較した。同様に本遺跡(図中では伊勢森と表示)についても平均を求め、結果を図11~14に示した。比較した遺跡は以下のとおりである(須永2003)。

吹屋:群馬県北群馬郡持村吹屋に所在する吹屋
 帆屋遺跡、中郷:同中郷に所在する中郷恵久保遺跡、
 田尻:同田尻に所在する田尻遺跡

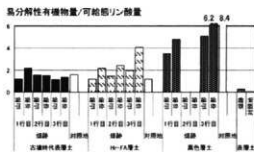


図10 供試土壌試料の易分解性有機物量/可給態リン酸量

全炭素量(図11)、易分解性有機物量(図12)ともに本遺跡の畑跡が特に高い傾向を示した。本遺跡の対照地の値は、他の遺跡とほぼ同様の値を示していることから、黒色層土を巻き上げている可能性が高い。同様の傾向がリン酸吸収係数(図13)についても認められた。

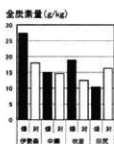


図11 古墳時代代表層土の全炭素量の平均

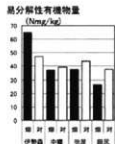


図12 古墳時代代表層土の易分解性有機物の平均

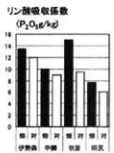


図13 古墳時代代表層土のリン酸吸収係数の平均

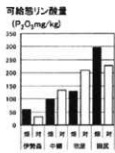


図14 古墳時代代表層土の可給態リン酸量の平均

一般に耕作に伴い自然植生下に比べ有機物量が減少することが知られている。同様の傾向が埋没遺跡でも確認できた(須永ら2003)。この傾向は全炭素量よりも易分解性有機物量において顕著であり、他の遺跡では、易分解性有機物量の畑跡の平均は対照地の平均に比べ低い傾向を示したが、本遺跡ではこうした傾向は認められなかった。本遺跡の対照地の値は、他の遺跡と同程度であることから、畑跡で特に高い傾向を示したのは、前述したように黒色層土の影響が顕著な可能性が高い。

可給態リン酸量(図14)については、中郷や吹屋では畑跡で高い傾向は明瞭ではなかったが、本遺跡では明瞭な傾向が認められた。畑跡に対照地に比べ高い傾向を示すのは、施肥の影響が考えられる。一方、リン酸吸収係数(図13)を比較したところ、本遺跡が畑跡、対照地ともに他の遺跡に比べ高いことから、植物生産への障害になっていた可能性が高く、こうした傾向からも施肥の必要性は高かったと考えられる。

5 謝辞

財団法人群馬県埋蔵文化財調査団の井上昌美氏、斎藤利昭氏、水田福夫氏、坂口一氏、山口逸弘氏、山村英二氏、小保方香里氏、群馬県市町村教育委員会の石井克己氏、貴重な畑遺構の土壌採取をさせて頂くに当たり、多大な便宜を図っていただくとともに、考古学に関する広範なご指摘を賜りました。心から厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 土壌環境分析法編集委員会編 1997. "土壌環境分析法" pp.1-427. 博友社, 東京.
 坂口一 1993. 火山噴火の年代と季節の鑑定法. 新井勇夫編 "火山災害考古学" pp.151-172. 古今書院, 東京.
 須永真子・飯上真一・岡俊明 2003. 浅間山噴火(1783年)に伴う泥流により埋没した畑遺構土壌の理化学的特徴. ベドロジスト. 47巻. 14-27.
 須永真子 2003. 埋没遺構土壌の理化学的特徴と地力評価. 京農工大学大学院連合農学研究科博士論文. pp.37-147.

第8章

まとめ



Ⅲ区 全景(北から)

Ⅲ区 FP下面畠跡について

1 はじめに

吹屋伊勢森遺跡では、Ⅲ区で畝立てされた畠を抽出した(第1図)。抽出した畠は全体の調査区域のうちの一部でしかないが、その面積は調査区域内で約2,700㎡に及び、調査区域外まで広がる部分を含めると、5,000㎡程度に達するものと推定される広い範囲の畠である。

しかし、この畠の一部にはウマの足跡が残され、また一部には道が通過することから、6世紀中頃のFPで埋没した時点では耕作が行われておらず、すでに放置されていたものである。さらに、畝の遺存状況や、畠として使用された面の下部の構造の状況から、これらは全て同時に耕作された可能性は低いものと考えられる。

したがって、ここではこの畠において、想定される耕作の状況や区画について検討してみたい。

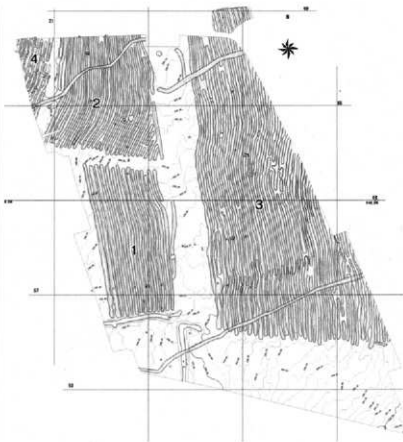
2 畝の平坦化と耕作土の状況

この畠は耕作の及んでいない部分を境に、4つの区画に分けられるが(第2図)、これらの区画は畝の高まりの状況が異なっている。とりわけ1号畠は他の3区画に比較して畝の高まりが最も高く、畝と畝間の凹凸が最も明瞭である。これに対して、他の3区画については、概ね同様な高まりと凹凸の状況を呈している。

この高まりと凹凸の状況の差は、畠が放置されてからFPが降下するまでの時間に差があることを示している可能性が高い。畝と畝間は放置された時間の経過とともに、風化して平坦化すると考えられることから、より平坦化が進んだ2～4号畠は、1号畠よりも古い時期に放置されたものと考えられる。一方、これらの耕作土の状況であるが、これを述べる前に土層断面における層の認定を、那須孝徳氏



第1図 FP下面全体図



第2図 Ⅲ区畠跡平面図

らの分類(那須・趙, 2003)に従って行いたい。

1号畝の土層断面において(第3図)、5層は畝耕作の基盤層である。次に4層の下面は畝立て作業の基底面である「加工面」に、1層の上面は「機能面」にそれぞれ相当し、1・2層は「作土」に分類される。4層は、1・2層が畝立て以降に崩れて畝間に堆積した土壌と考えられることから、これも広い意味での「作土」と考えることができる。

ところで、この断面においては、那須氏らの分類には存在しない3層が存在する。これは攪拌が全く行われていない基盤層の上位に位置し、1・2層に比較してその土壌化は進んでいないものの、FPの下位に位置する6世紀初頭のFAを鋤込んだ攪拌が行われた土壌である。

一方、その下面が「加工面」である4層は、3層を切り込んでいることから、少なくとも畝立て作業の前には存在した土壌である。この土壌の成因については明らかではないが、畝立て作業との前後関係を明確にする必要性から、ここではあえて「攪拌土」と呼称したい。

さて、1~4号畝には、耕作土及び畝として使用された面の下部の構造にも違いが認められる。1号畝は、畝の高まりが最も高く、土層断面において耕作土などの識別が比較的容易である(第3図)。

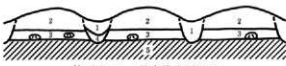
2・4号畝は、1号畝に比較して畝の高まりが低いが、土層は基本的に1号畝と同様に分層される(第4図)。しかし、1号畝では1・2層に分層されていた「作土」が2層のみである。これは、単純に考えれば1層が、畝の放棄後に風化で崩落したか、或いは畝の高まりの状況から耕作時に最も近い1号畝の「作土」が、畝の表面に有機的な土壌をより多く含んでいるかのいずれかであると考えられる。

3号畝には、1・2・4号畝とは大きく異なる土層の形成がみられる。すなわち、畝の中心部の下位に、1・2・4号畝では存在しなかった、別の畝立て作業による「加工面」が存在することで、これは平面的にも確認することができる(第5図、付図3)。

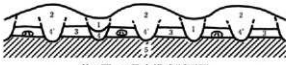
畝の中心部の下位に位置する「加工面」を被覆す



第3図 1号畝模式断面図



第4図 2・4号畝模式断面図



第5図 3号畝模式断面図

る4層は、4層に比較して黒味が少なく、FAを鋤込んだ攪拌の度合いが少ない土壌であることから、この「加工面」はFP直下で残存する畝の、前段階の耕作に伴う畝間の痕跡であるものと考えられる。つまり、3号畝には畝に平行する1回の畝替えを想定することができる。

この畝替えと考えられる畝下の溝については、本遺跡以外でも旧地表面の残る畝の下位を調査する過程で、畝に平行或いは直行してしばしば認められるもので、溝を被覆する土壌は、畝下と畝間で土壌化の度合いが異なって検出される場合が多い。

以上の1~4号畝における耕作土の検討から、1号畝の耕作土が2~4号畝に比較して遺存状態が良いものと判断することができる。つまり、2~4号畝は1号畝より古い時期に耕作されたと考えられ、これは畝の風化による平坦化の状況からみた新旧関係と一致した現象を示している。

したがって、これらの区画は3号畝(古段階)→3号畝(新段階)・2・4号畝→1号畝の順で耕作が行われた可能性が高く、このうちの3号畝については1回の畝替えが行われている。但し、2・3・4号畝が同時に耕作されたか否かについては確証がなく、3号畝のみに畝替えが行われている事実からすると、3号畝(古)→3号畝(新)→2・4号畝→1号畝の順である可能性も考えられる。

3 畠の区画について

1～4号畠は、耕作の及んでいない部分を境界としている。その最も大きな境は、1・2号畠と3号畠を画すもので、幅約8mの空白部で南北に区画され、1号畠と2号畠、及び2号畠と4号畠の境には、それぞれ幅約2mの空白部が存在する。

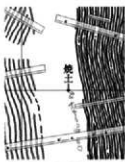
特徴的なのは、これらの配置である。1号畠と2・3号畠には時間差が認められるにもかかわらず、畝立てされた各区画の範囲は、その及ばない空白部に規制された配置をとっている。

例えば2号畠の南東隅は、畝の条が他に比較して極端に短いが、これはその東側の空白部に規制されたためであると考えられる。また、1・2号畠と3号畠の境及び、1号畠と2号畠の境についても意図的に区画された空白部で画されており、1号畠と3号畠の南辺も直線的ではないものの、ほぼ揃っていると見ることができよう。

つまり、これらの畠については何らかの目的で、あらかじめ区画の設定が行われている可能性が高いと考えられるのである。

さらに、畠の耕作土を除去したFA上面の調査において、興味深い事実が認められた。それは3号畠の西辺から2mの位置に、西辺に平行する長さ12mの焼土列が認められたことである(図6、付図3)。このような焼土列は、この地域で検出される畦状遺構の下部にしばしば認められるもので、その成因については未だ不明な点が多いが、畦状遺構の部分以外で検出される例はほとんど認められない。したがって、3号畠の西側の焼土列の部分には、FP直下では既に平坦化した畦状遺構が存在し、しかもこの畦状遺構は3号畠と平行する位置に配置されていたことになる。

この事実は先ほどの区画の設定が、この調査区の周辺で検出される、畦状遺構が構築された範囲



第6図 FA上面焼土列

までも含んでいる可能性が高いことを示唆している。これは、畠の南側に位置する1・2号畦状遺構の配置からも確認することができる。1号畦状遺構は1号畠の南端を画し、2号畦状遺構は1号畦状遺構に直交する方向で、その北端は3号畠の南辺の延長線上に位置している。さらに、これらは交わることなく、その最も近接する地点で僅かな間隔を空けて配置されているのである(図2)。

つまり、畝立てされた畠と周辺の畦状遺構とは関連性があり、仮にFPの降下がなければ、周辺の畦状遺構が構築された範囲が、やがてその区画に基づいて畝立てされた畠になった可能性が考えられる。

4 まとめ

吹屋伊勢森遺跡の畠の状況を検討してきたが、この調査において確認できたことは以下のように整理することができる。

①4区画の合計で5,000㎡にも及ぶ畝立てされた畠が検出されたが、これらは全てが同時に耕作が行われたものではなく、ある範囲を単位としてその耕作地は移動している。

②これらの畠については、あらかじめ区画の設定が行われている可能性があり、またその対象地はFP下面で畦状遺構のみが構築される範囲も含まれるものと考えられ、畝立てされた畠と周辺の畦状遺構とは、一連のものである可能性が高い。

以上、吹屋伊勢森遺跡における畠の耕作の状況を検討してきた。この地域の土地利用については、「牧」とする高井佳弘氏による詳細な分析がある(高井, 2006)。また、近年ではこの地域の西側で、古墳時代前期～後期の集落の様相が明らかになってきた。

今後は、こうした畦状遺構を伴う何らかの耕起、畝立てされた畠、及び放牧状態にあるウマの存在、そして近隣の集落をも含めて、地域としてこの土地利用を検討する必要があるものと考えられる。

〔引用文献〕

- 那須孝徳・趙哲清 2003「地層の見方」『環境考古学マニュアル』pp47-48 同成社
高井佳弘 2005「古墳時代における馬と農耕」『古代東国の考古学』大金直亮氏追悼論文集 pp45-60 叢友社

写真図版



遺跡遠景（中央が吹屋伊勢森遺跡、奥は子持山、右に利根川が流れる。）



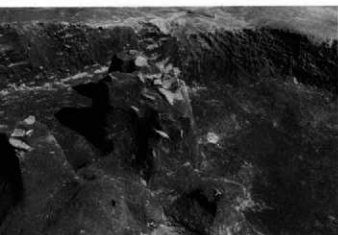
1号住居 全景



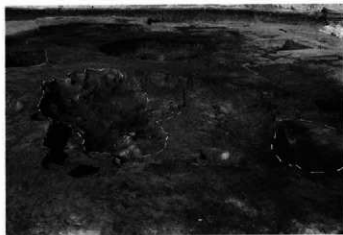
1号住居 断面



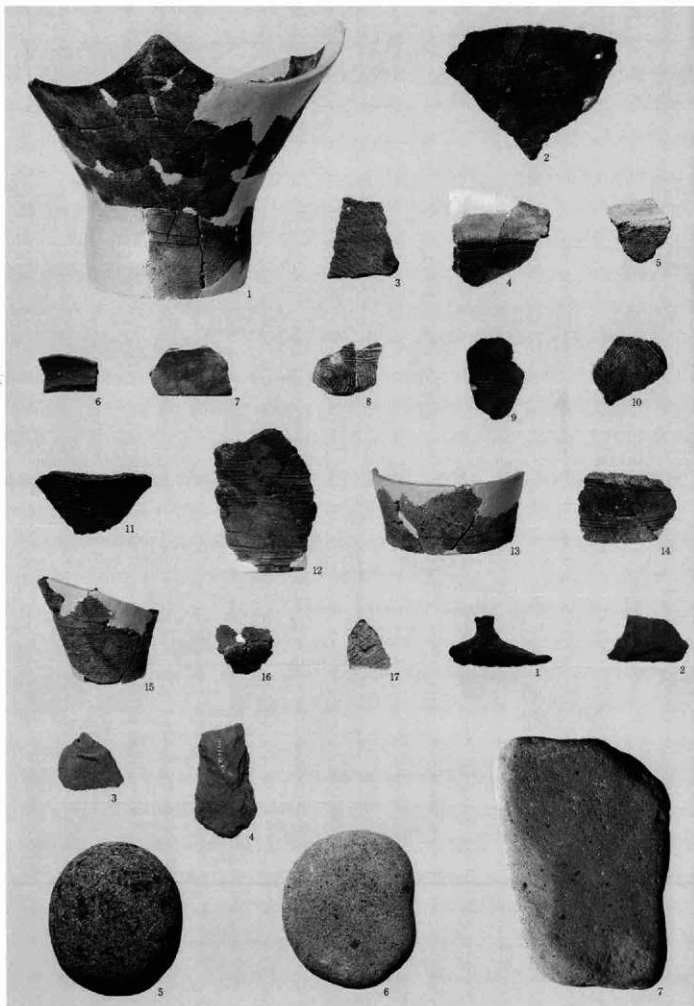
1号住居 焼土出土状況



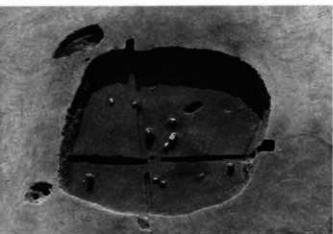
1号住居 遺物出土状況



1号住居 掘り方(破線は倒木範囲を示す)



1号住居 出土遺物



2号住居 全景



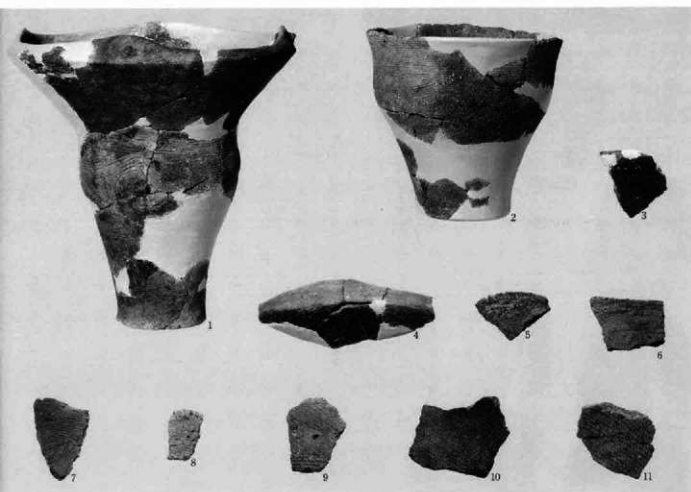
2号住居 掘り方



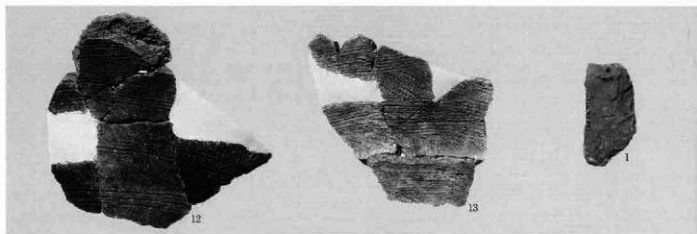
2号住居 断面



2号住居 床下土坑遺物出土状況



2号住居 出土遺物



2号住居 出土遺物



4号住居 全景



4号住居 断面



4号住居 遺物出土状況



4号住居 炉跡(奥:1号炉、手前:2号炉)



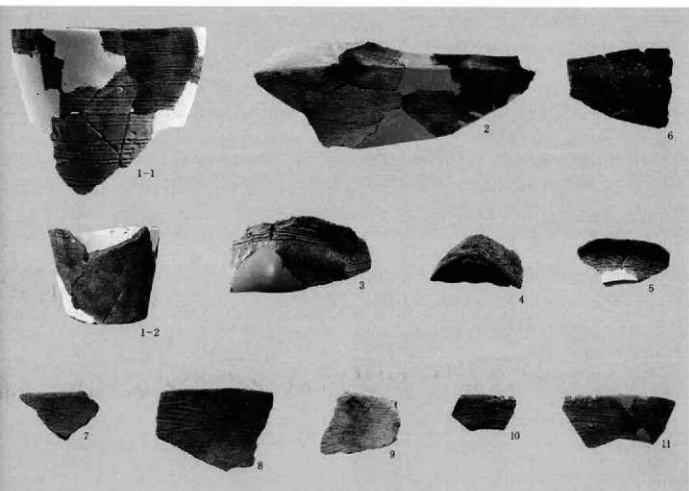
4号住居 炉跡断面(左:1号炉、右:2号炉)



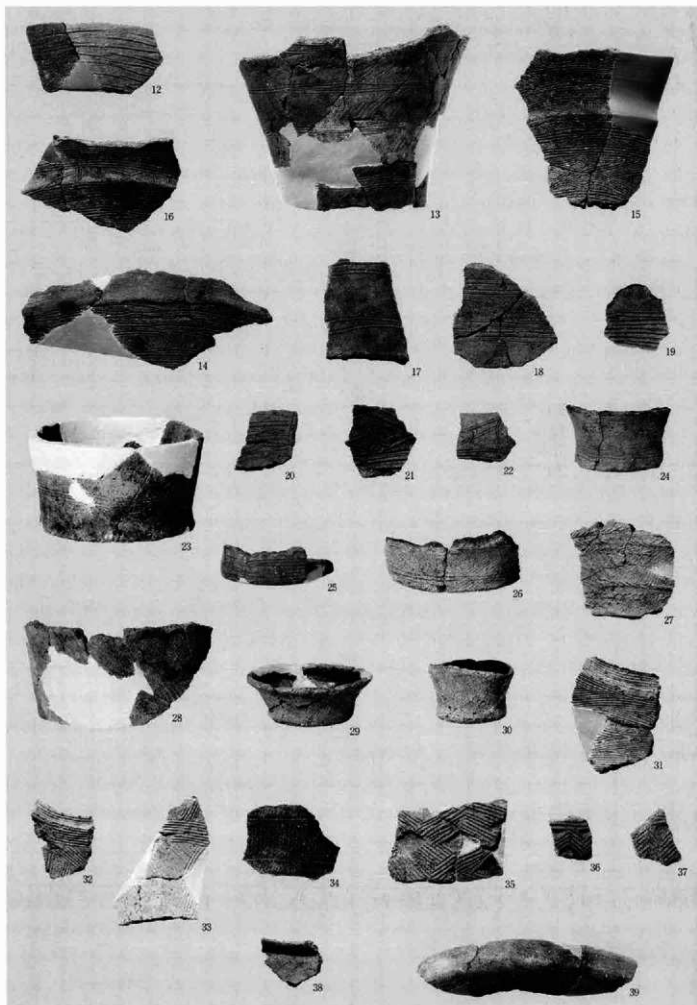
4号住居 焼土1



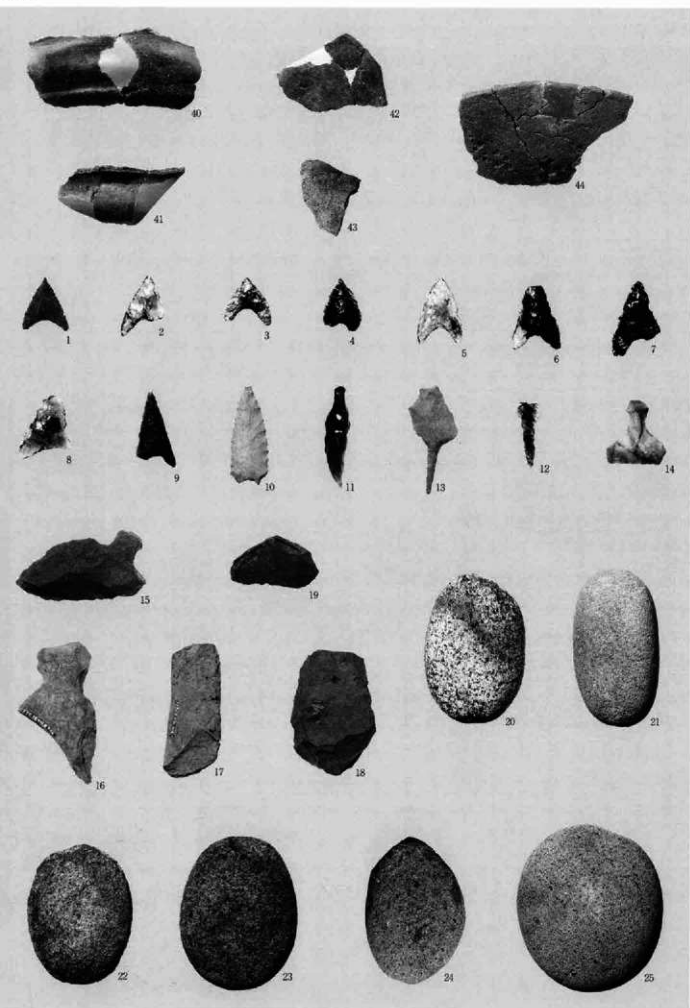
4号住居 焼土1断面



4号住居 出土物



4号住居 出土遺物





5号住居(新段階)全景



5号住居(古段階)全景



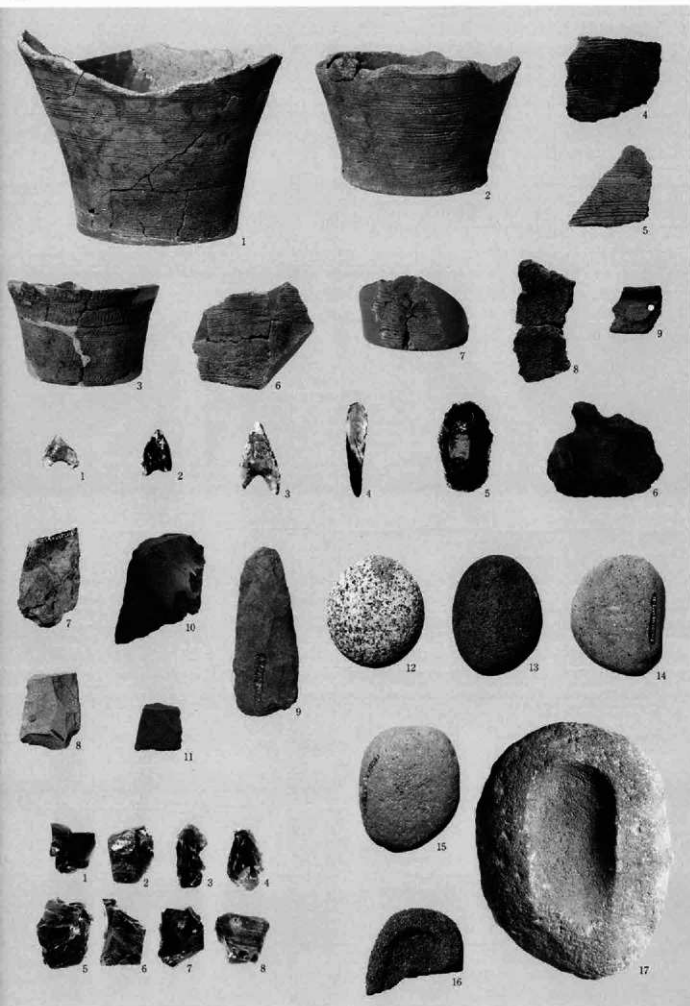
5号住居 断面



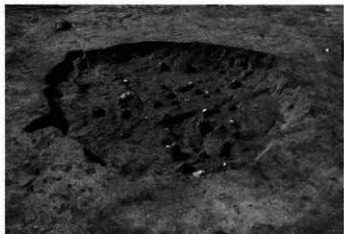
5号住居 埋設土器(No1・No3)



5号住居 2号ピット遺物出土状況



5号住居 出土遺物



6号住居 全景



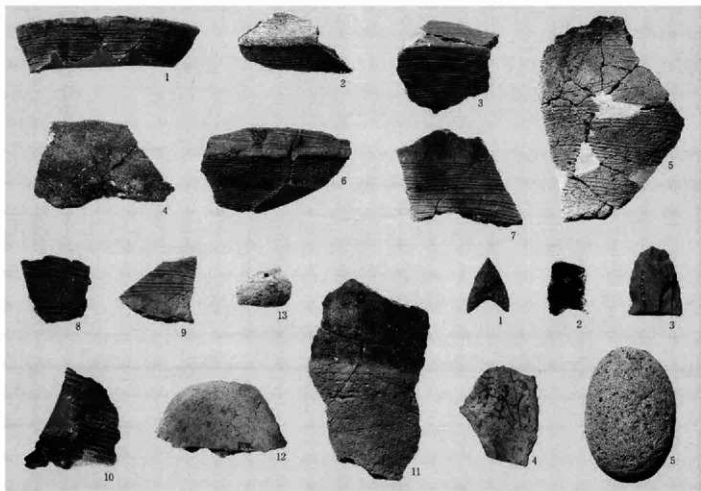
6号住居 掘り方



6号住居 断面



6号住居 炉跡断面



6号住居 出土遺物



I区-12·13·14号土坑 全景



I区-12号土坑 断面



I区-12号土坑 遗物出土状况



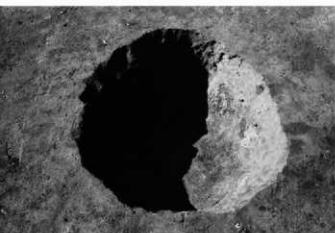
I区-13号土坑 断面



I区-14号土坑 断面



I区-13·14号土坑 遗物出土状况



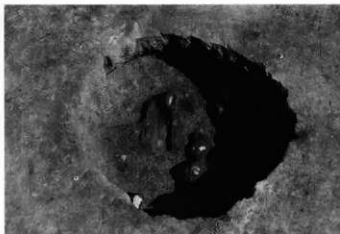
I区-16号土坑 全景



I区-16号土坑 断面



I区-16号土坑 遗物出土状况



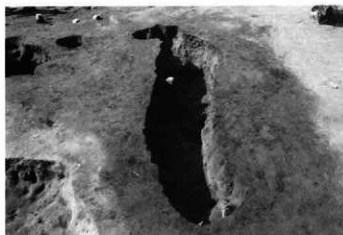
I区-17号土坑 全景



I区-17号土坑 断面



I区-27号土坑 断面



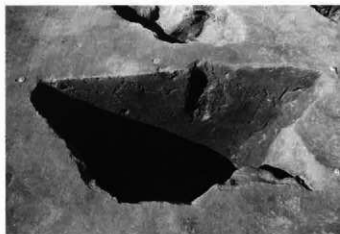
I区-32号土坑 全景



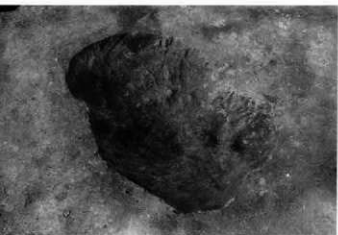
I区-32号土坑 断面



I区-33号土坑 全景



I区-33号土坑 断面



I区-39号土坑 全景



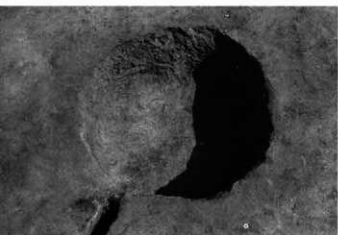
I区-39号土坑 断面



I区-40号土坑 全景



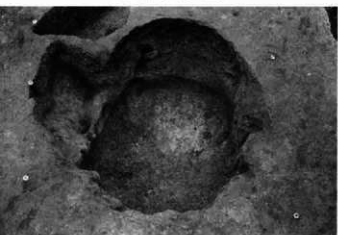
I区-40号土坑 断面



I区-41号土坑 全景



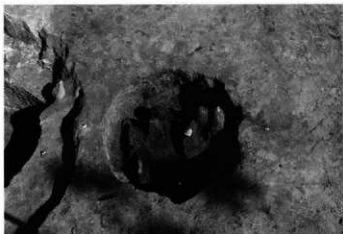
I区-41号土坑 断面



I区-42号土坑 全景



I区-42号土坑 遗物出土状况



I区-43号土坑 全景



I区-43号土坑 断面



I区-44号土坑 全景



I区-44号土坑 断面



I区-45·46号土坑 全景



I区-45·46号土坑 断面



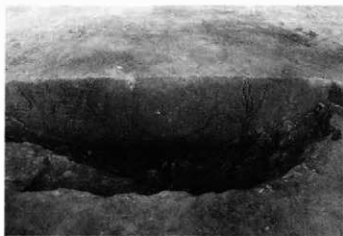
I区-46号土坑 烧土断面



I区-47号土坑 断面



I区-48号土坑 全景



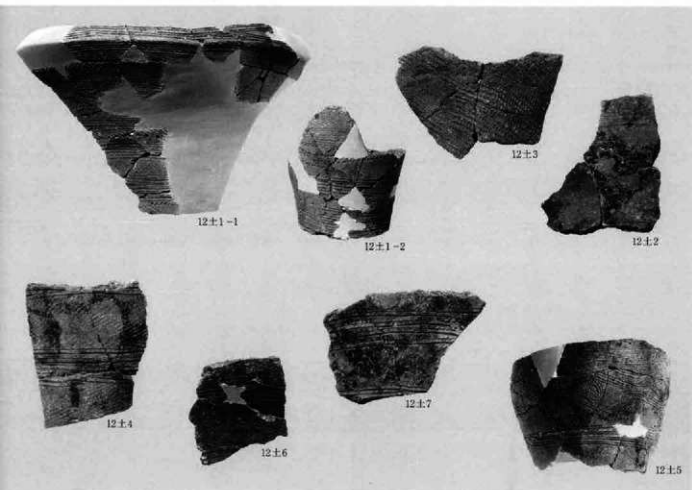
I区-48号土坑 断面



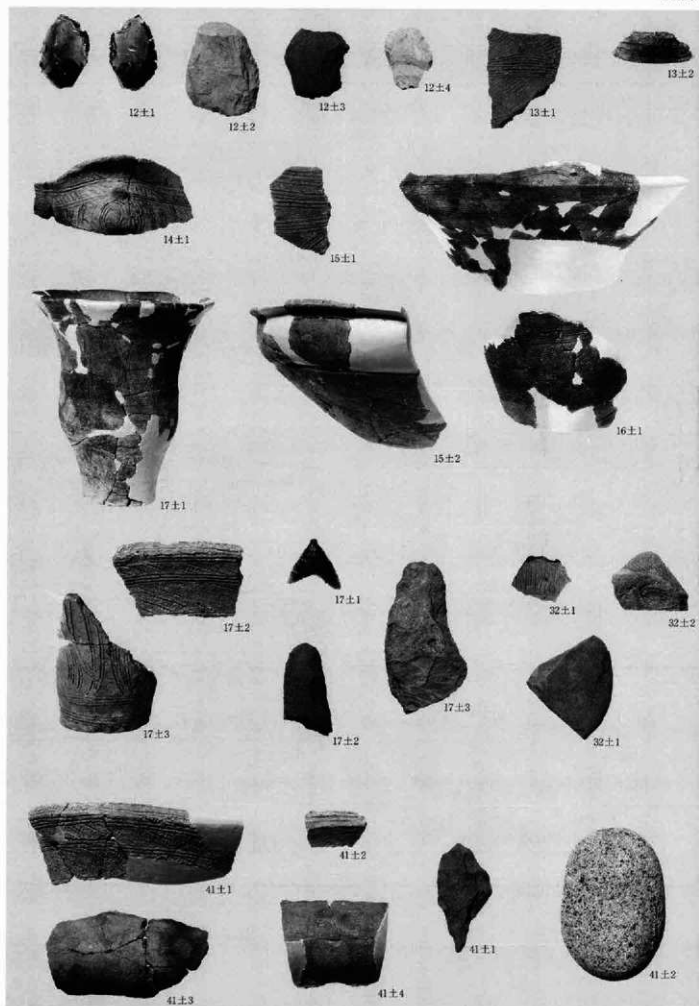
I区-49号土坑 全景



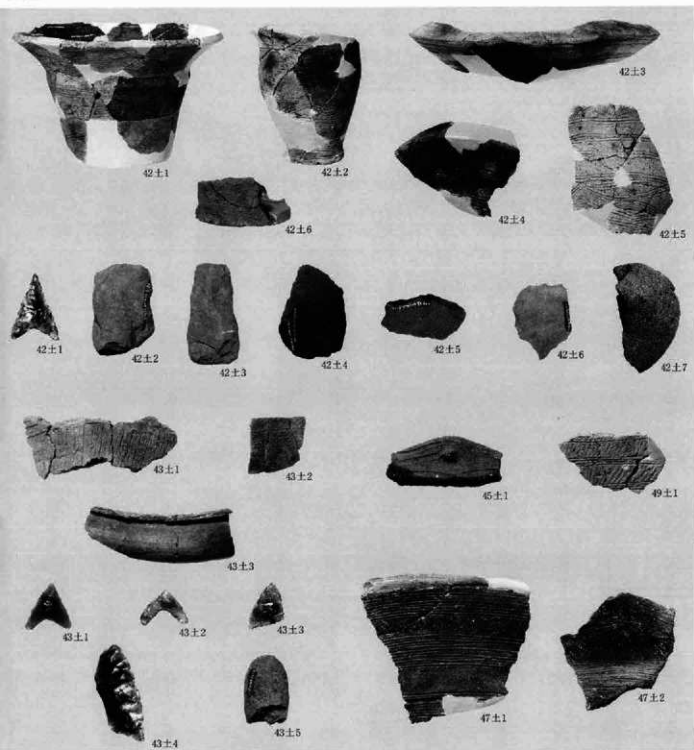
I区-49号土坑 断面



I区-12号土坑 出土遗物



I区-12~17·32·41号土坑 出土遗物



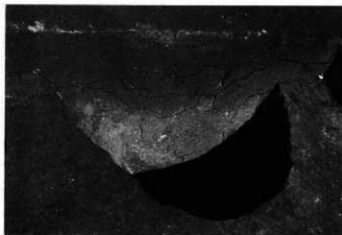
I区-42·43·45·47·49号土坑 出土遗物



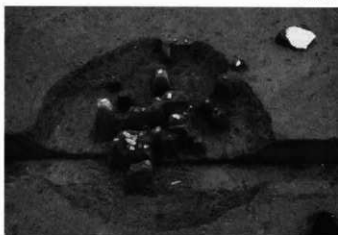
Ⅱ区-4号土坑 断面



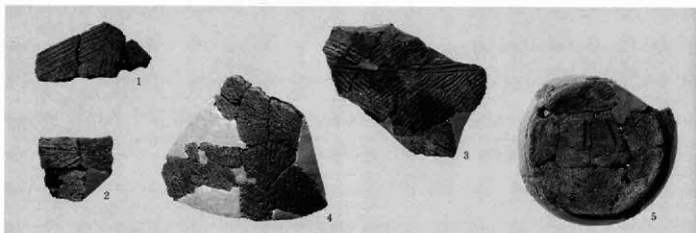
Ⅲ区-5号土坑 全景



Ⅲ区-5号土坑 断面



Ⅲ区-6号土坑 全景



Ⅲ区-6号土坑 出土遗物



Ⅳ区-3号土坑 全景



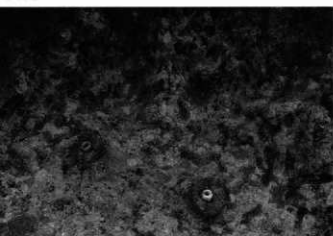
Ⅳ区-3号土坑 断面



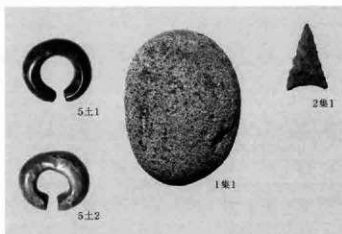
Ⅳ区-5号土坑 全景



Ⅳ区-5号土坑 断面



IV区-5号土坑 遺物出土状況



IV区-5号土坑・I区-1号集石・II区-2号集石 出土遺物



I区-1号集石



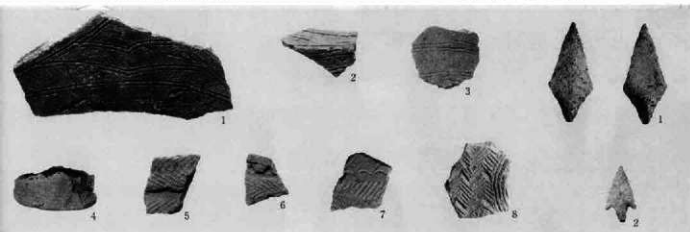
II区-2号集石



O区4面 遺物出土状況



O区4面 遺物出土状況



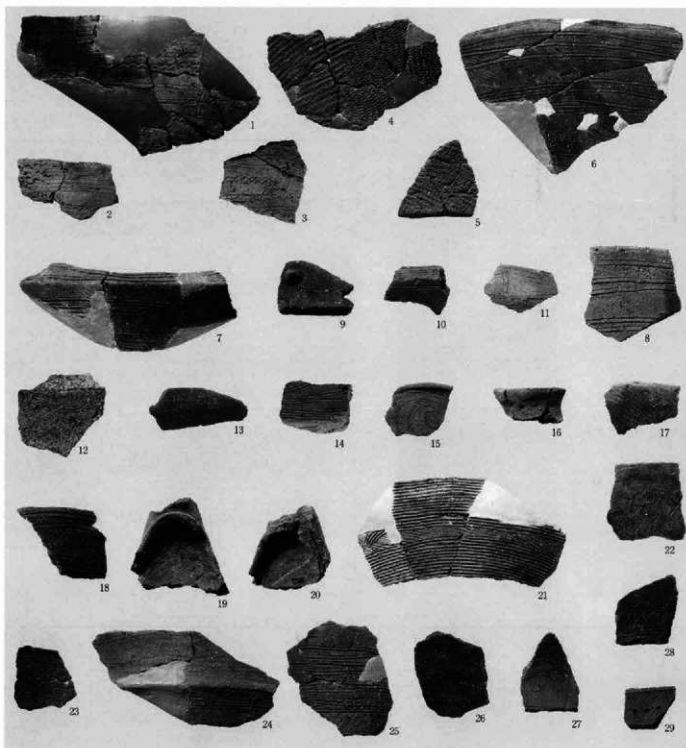
O区 出土遺物



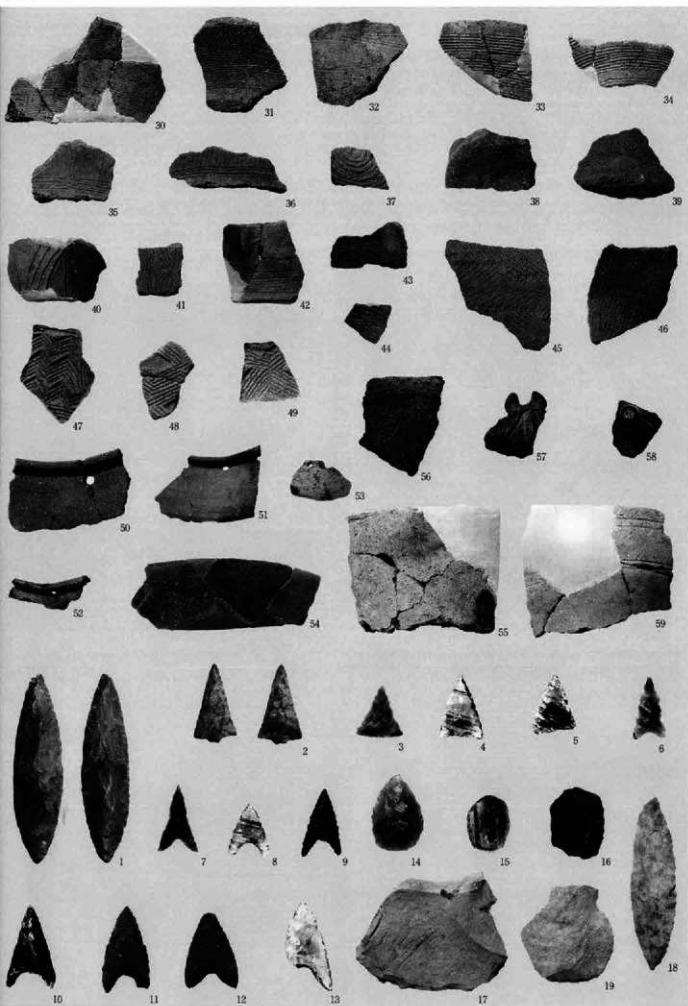
I区4面 遺物出土状況



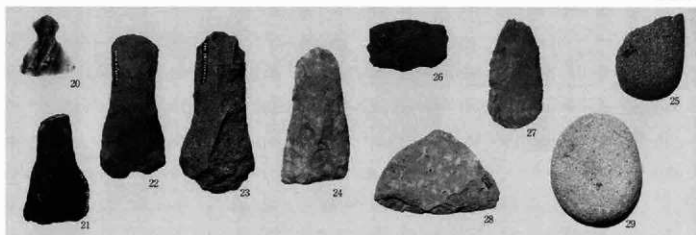
I区5面 全景



I区 出土遺物



I区 出土遺物



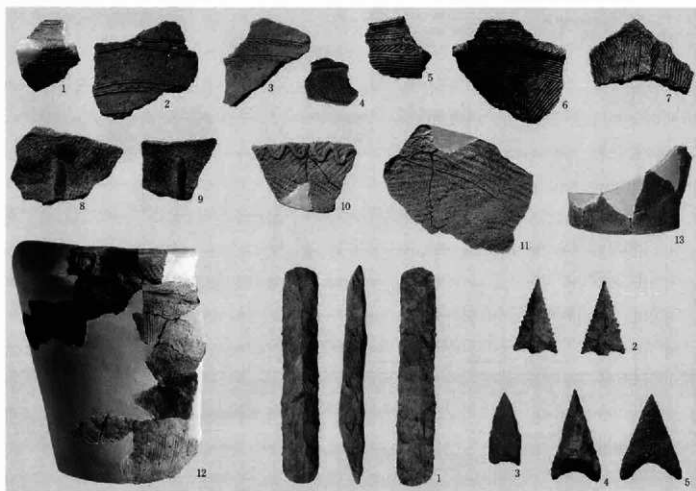
I区 出土遺物



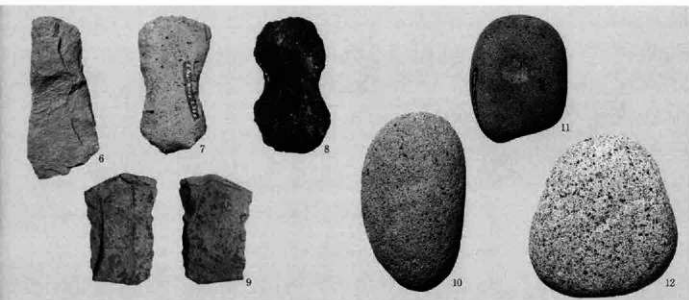
II区4面 全景



II区4面1K-33G 神子柴型石斧出土状況



II区 出土遺物



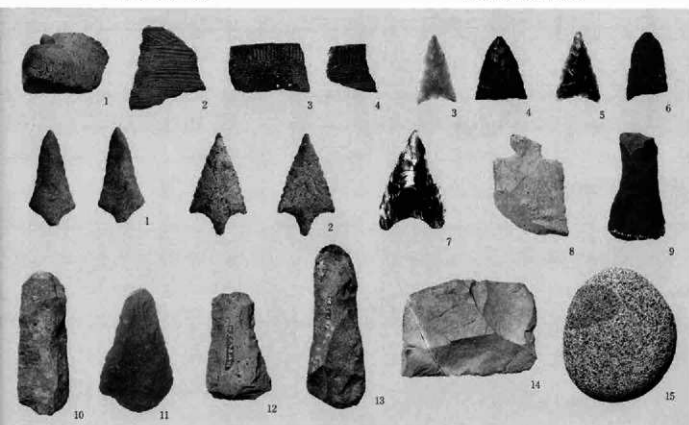
Ⅱ区 出土遺物



Ⅲ区4・5面 全景



Ⅲ区4面 遺物出土状況



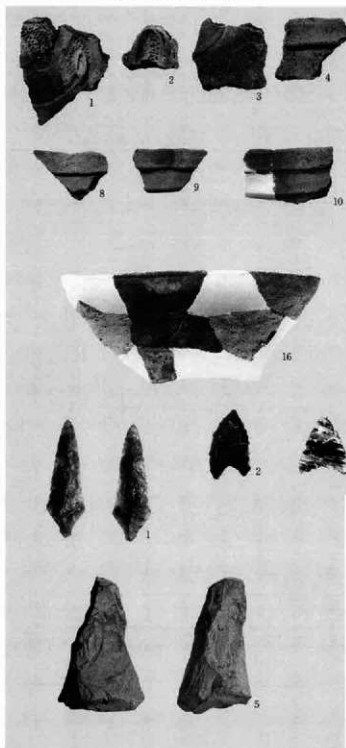
Ⅲ区 出土遺物



IV区4面 遺物出土状況



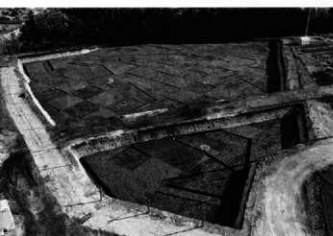
IV区4面2J-66G付近 遺物出土状況



IV区 出土遺物



IV区5面 全景



I区3面 全景



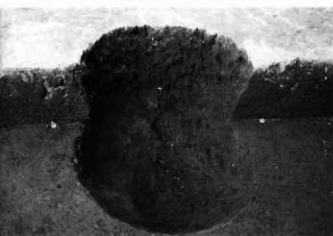
Ⅲ区-1号掘立柱建物 全景



Ⅲ区-1号掘立ピット1 断面



Ⅲ区-1号掘立ピット4 断面



Ⅲ区-2号土坑 全景



Ⅲ区-2号土坑 断面



Ⅲ区-3号土坑 全景



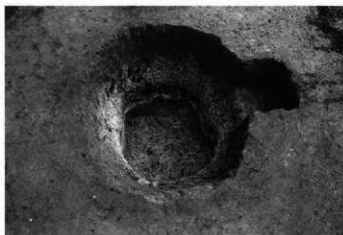
Ⅲ区-3号土坑 断面



Ⅲ区-1号用途不明土坑 全景



Ⅲ区-1号用途不明土坑 断面



Ⅳ区-1号用途不明土坑 全景



Ⅳ区-1号用途不明土坑 断面



Ⅳ区-2号用途不明土坑 全景



Ⅳ区-2号用途不明土坑 断面



Ⅳ区-3号用途不明土坑 全景



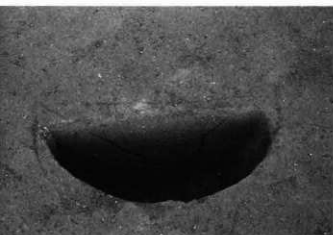
Ⅳ区-3号用途不明土坑 断面



Ⅲ区3面 ビット群



Ⅲ区-5号ビット 全景



Ⅲ区-9号ビット 断面



Ⅲ区-15号ビット 断面



Ⅳ区3面 ビット群



Ⅳ区-10号ビット 断面



Ⅳ区-16号ビット 断面



Ⅳ区-21号ビット 断面



Ⅲ区-1・3号畠(南から)



Ⅲ区-1・2号畠(北から)



Ⅲ区-3号畠(北から)



Ⅲ区-1・2号畠(北から)



Ⅱ区2面(FP下面) 全景



Ⅲ区-1号畠(FP除去前) (南から)



Ⅲ区-1号畠



Ⅲ区-1号畠(南から)



Ⅲ区-1号畠(南から)



Ⅲ区-1号畠(北から)



Ⅲ区-1号畠 FA 上面(南から)



Ⅲ区-1号畠(手前:FP下面、奥:FA上面)



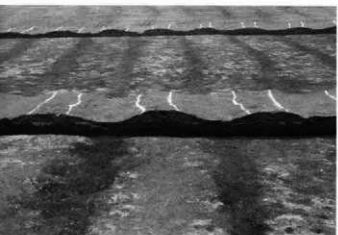
Ⅲ区-1号畠 断面A



Ⅲ区-1号畠 断面C (白く見えるのがFA)



Ⅲ区-1号畠 断面A



Ⅲ区-1号畠 断面A



Ⅲ区-1号畠 断面B



Ⅲ区-2号畠(南から)



Ⅲ区-2号畠(南西から)



Ⅲ区-2号畠(北東から)



Ⅲ区-2号畠(北東から)奥に見えるのが樺名山



Ⅲ区-1・2号畠 FA上面(南西から)



Ⅲ区-1・2号畠 FA上面(南西から)



Ⅲ区-2号畠 FA上面(北から)



Ⅲ区-1・2号畠境 断面B



Ⅲ区-2号畠 断面A



Ⅲ区-2号畠 断面A



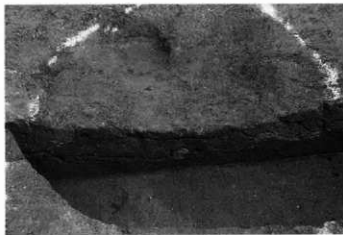
Ⅲ区-2号畠 断面C



Ⅲ区-2号畠 断面C



Ⅲ区-1号窪み 断面A



Ⅲ区-2号窪み 断面A



Ⅲ区-3号畠(北西から)



Ⅲ区-3号畠(北から)



Ⅲ区 FA上面



Ⅲ区-3号畠内ウマの足跡



Ⅲ区-3号畠 FA上面(北から)



Ⅲ区-3号畠 FA上面(南から)



Ⅲ区-3号畠 FA上面(南から)



Ⅲ区-3号畠 FA上面(南から)



Ⅲ区-3号畠 FA上面(南から)



Ⅲ区-3号畠 断面A



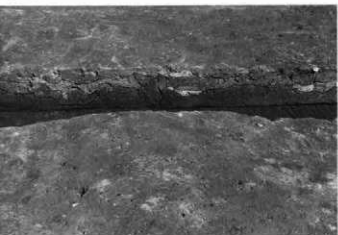
Ⅲ区-3号畠 断面A



Ⅲ区-3号畠 断面B



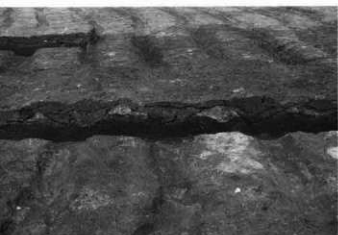
Ⅲ区-3号畠 断面B



Ⅲ区-焼土層 断面C



Ⅲ区-3号冢 断面D



Ⅲ区-3号冢 断面D



Ⅲ区北側拡張区3号冢・1号道



Ⅲ区-4号冢・1号道(南から)



Ⅲ区-4号冢(南東から)



Ⅲ区2号 全景(北東から)



Ⅲ区-2号畦状遺構(白丸はウマの足跡)



0区-1号畦状遺構 断面 A



1区2面(FP下面) 全景



1区2面(FP下面) 全景



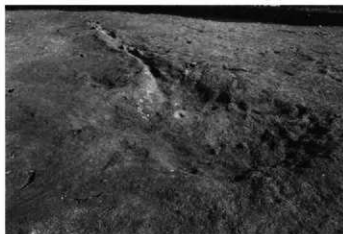
1区-1・2号畦状遺構・1号道(南から)



1区-1号畦状遺構・1号道(南から)



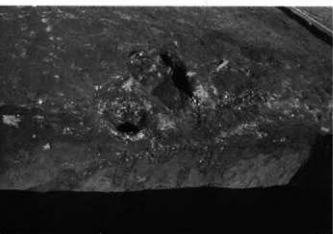
1区-2号畦状遺構・2号道(南東から)



1区-1号倒木(西から)



1区-2号倒木(東から)



I区-2号倒木 断面A



I区-2号倒木 完掘状況



I区-2号倒木 炭化物



I区-2号畦状遺構 断面A



I区-2号道(北西から)白丸はウマの足跡



I区-3号畦状遺構・1号道(東から)



I区-3号畦状遺構・1号道 断面A



I区-4号畦状遺構(西から)



I区-4号畦状遺構 断面C



I区-4号畦状遺構周辺の地表面の様子



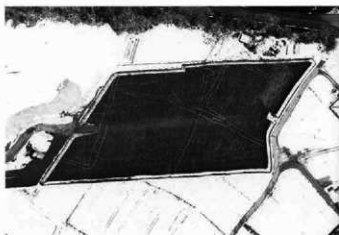
I区-4・5号畦状遺構(南から)



I区-5号畦状遺構 断面A



I区-1号窪み(南西から)



II区2面(FP下面) 全景



II区2面(FP下面)全景(北西から)



II区2面 ウマの足跡



Ⅱ区-1・2号畦状遺構(南西から)



Ⅱ区-1号畦状遺構 断面A



Ⅱ区-1号畦状遺構 断面C(西から)



Ⅱ区-3号畦状遺構(南から)



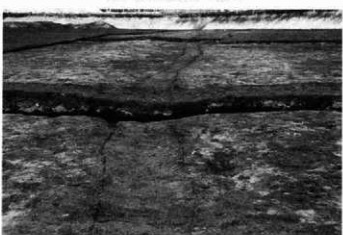
Ⅱ区-3号畦状遺構 断面B



Ⅱ区-3号畦状遺構 断面B



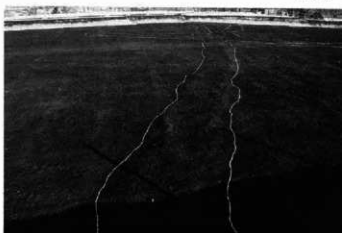
Ⅱ区-3号畦状遺構 断面C



Ⅱ区-1号遺構(南から、FA上面で検出)



Ⅱ区-1号道(南から、FA上面で検出)



Ⅱ区-4号畦状遺構(西から)



Ⅱ区-4号畦状遺構 断面B



Ⅱ区-4号畦状遺構 断面B



Ⅱ区-6号畦状遺構(西から)



Ⅱ区-6号畦状遺構 断面E



Ⅱ区-6号畦状遺構 焼土・炭化物検出状況(西から)



Ⅱ区-6号畦状遺構 焼土・炭化物検出状況



Ⅲ区-1・2号畦状遺構



Ⅲ区-2号道(西から)



Ⅲ区-1号畦状遺構 断面B



Ⅲ区-1号畦状遺構 断面C



Ⅲ区-2号道 断面A



Ⅳ区2面(FP下面) 全景(南から)



Ⅳ区2面(FP下面) 全景



Ⅳ区2面(FP下面) 全景



IV区-1号畦状遺構(北から)



IV区-2面(Hr-FP下面)



IV区南東部 ウマの足跡(西から)



IV区南東部 ウマの足跡



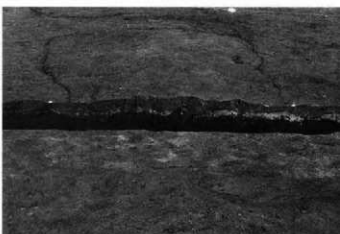
IV区 2H-50G付近 地表面の様子



IV区-1号畦状遺構(西から)



IV区-1号畦状遺構 断面B(分層前)



IV区-1号畦状遺構 断面B(分層後)



IV区-1号畦状遺構 断面B



IV区-2号畦状遺構 断面B



IV区-1・3号畦状遺構(南から)



IV区-1・3号畦状遺構(北東から)



IV区-3号畦状遺構(東から)



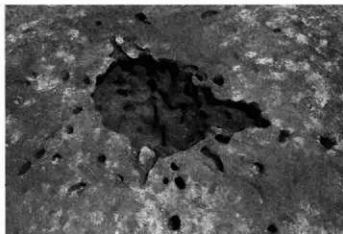
IV区-3号畦状遺構(西から)



IV区-3号畦状遺構 断面D



IV区-3号畦状遺構・焼土(南から)



IV区-1号立木



IV区-2号立木



IV区-3号畦状遺構・1号道(南東から)



IV区-4・5号畦状遺構(南東から)



IV区-5・6号畦状遺構(南から)



IV区北端部 ウマの足跡



IV区-4号畦状遺構 断面 A



IV区-6号畦状遺構 断面 B



I区1面 全景



II区1面 全景



III区1面 全景



IV区1面 全景



II区-1号溝 全景(中央を横切るのは自然の谷)



II区-1号溝 断面



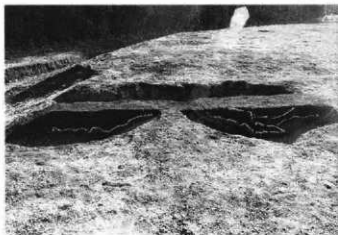
II区-1号井戸 全景



I区-1号土坑 断面



I区-2号土坑 断面



I区-5·6号土坑 断面



I区-5号土坑 断面



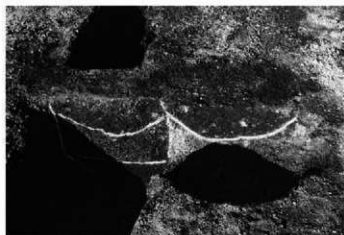
I区-6号土坑 断面



III区-1号土坑 断面



I区-4号耕作坑 断面



I区-7号耕作坑 断面



I区-10号耕作坑 断面



Ⅲ区-1号耕作坑 断面



Ⅲ区-26号耕作坑 断面



Ⅲ区-31号耕作坑 断面



Ⅲ区-64·65号耕作坑 断面



Ⅲ区-47号耕作坑 全景



Ⅲ区-47号耕作坑 断面



Ⅲ区-67·68号耕作坑 断面



Ⅲ区-75·76号耕作坑 断面



IV区-5号耕作坑 断面



IV区-33号耕作坑 断面



IV区-37号耕作坑 断面



IV区-40号耕作坑 断面



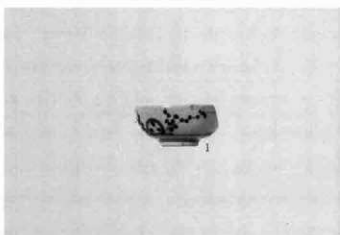
III区 耕作坑群



III区 耕作坑群



III区 道跡 (FPが変色している部分)



II区-47号耕作坑 出土遺物

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第373集

吹屋伊勢森遺跡

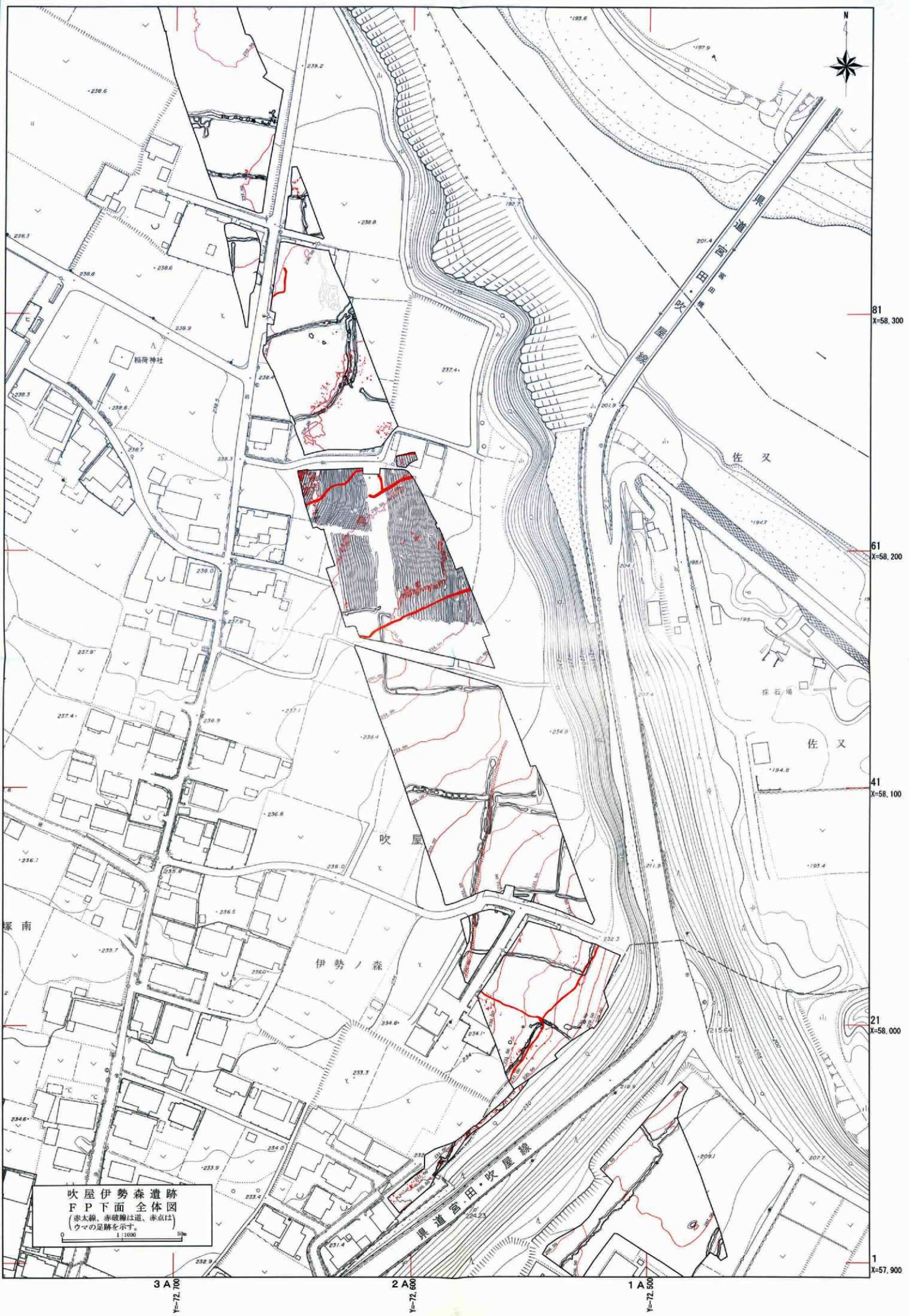
一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その2)報告書 第1集



平成18年(2006年)3月24日 発行

編集・発行 / 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377-8555 群馬県渋川市北橋町下箱田784-2
電話(0279) 52-2511

印刷 / 日本特急印刷株式会社



81
X=58,300

61
X=58,200

41
X=58,100

21
X=58,000

1
X=57,900

吹屋伊勢森遺跡
FP下面全体図
(赤太線、赤破線は道、赤点は
ウマの足跡を示す。
1:1000

3 A 2
Y=72,000

2 A 2
Y=72,000

1 A 2
Y=72,000

東道富田・吹屋線

豊田川

佐又

佐又

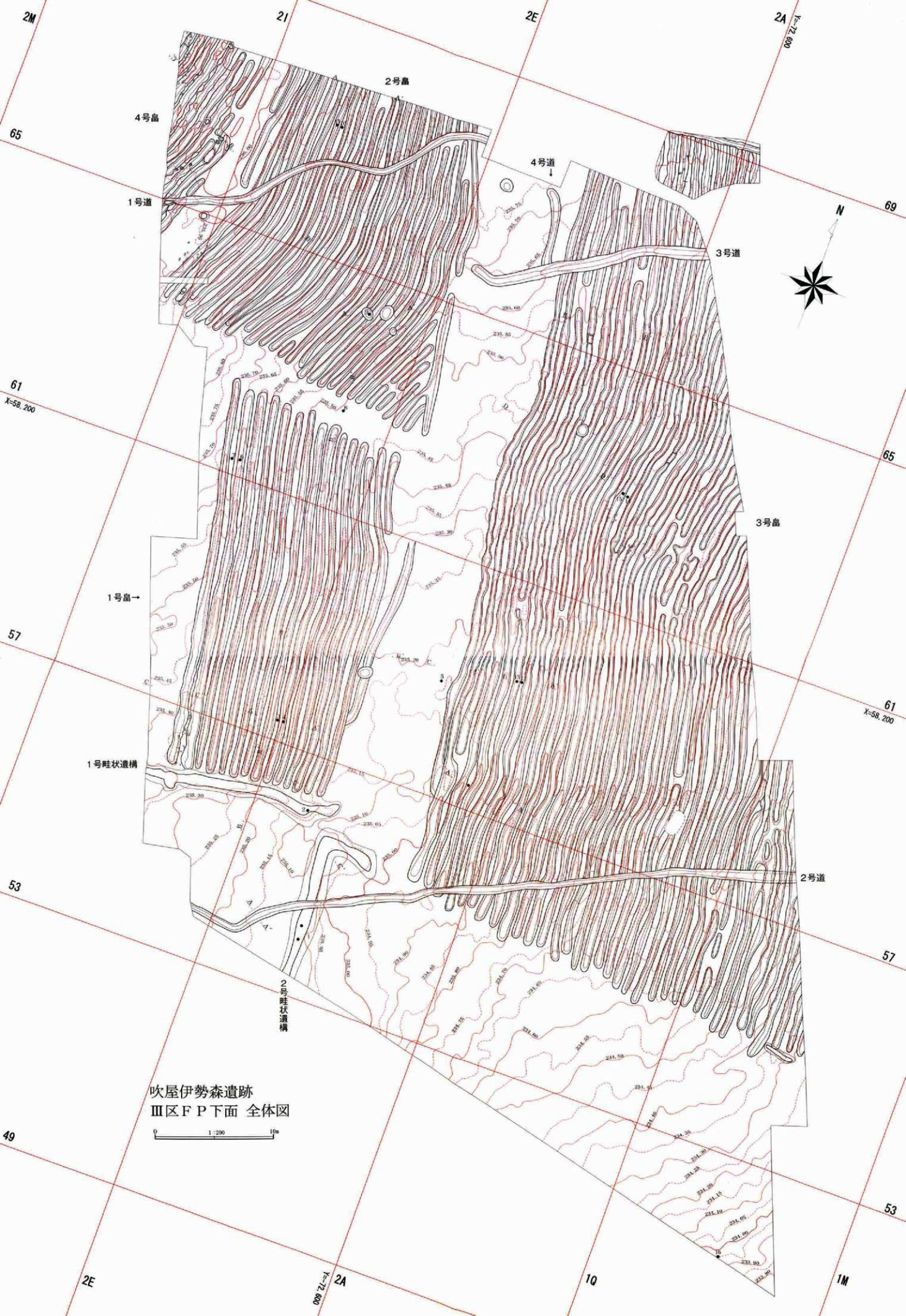
吹屋

伊勢ノ森

家南

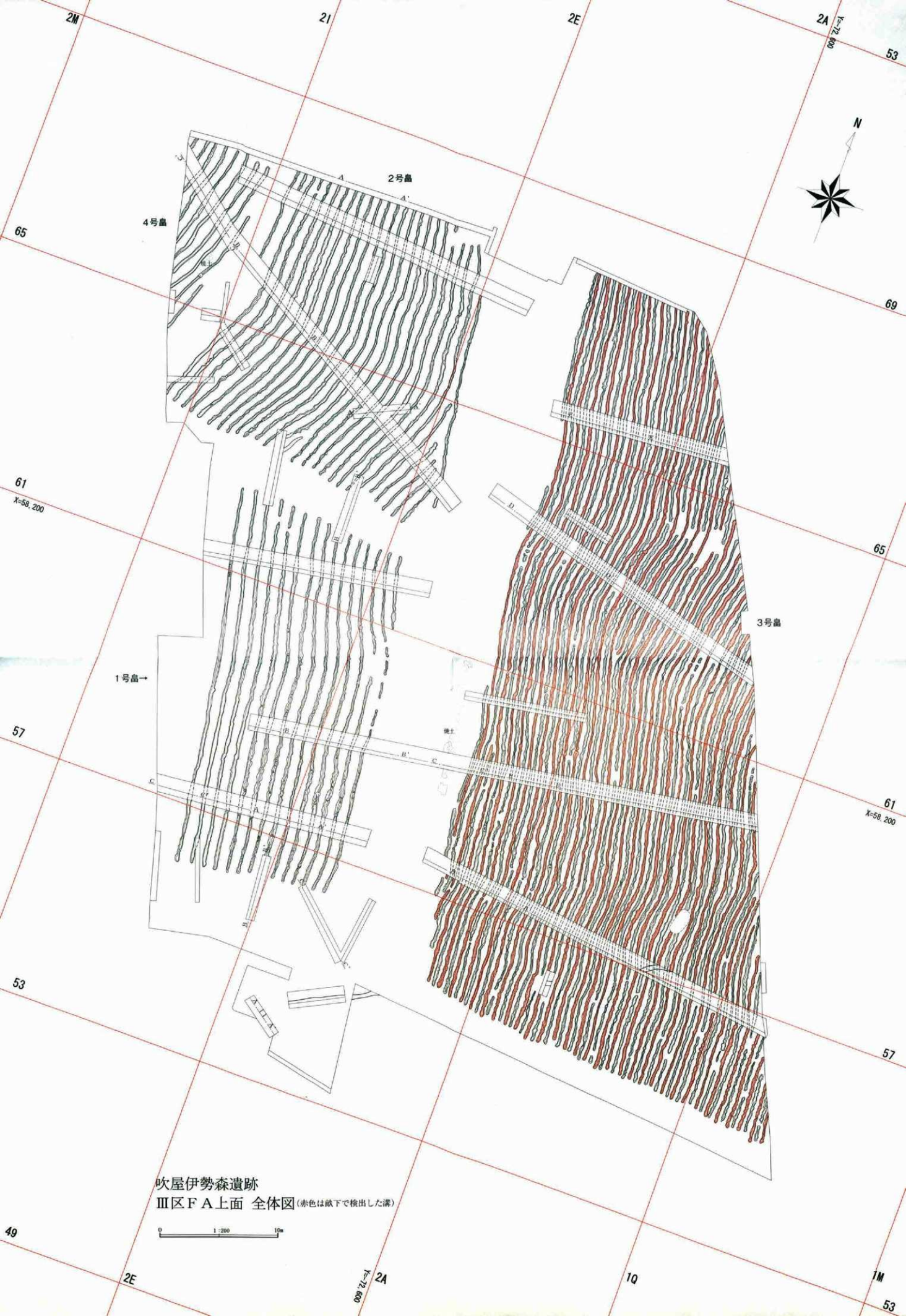
稲荷神社

採石場



吹屋伊勢森遺跡
Ⅲ区F P下面 全体図

0 1 200 10m



吹屋伊勢森遺跡
III区FA上面 全体図 (赤色は畝下で検出した溝)

